

批評・紹介

文祿・慶長役における被擄人の研究

内藤 簡 輔 著

昭和五十一年三月 東京 東京
大學出版會 A5判 七九三頁

一

著者内藤簡輔氏は、この十數年來、文獻調査のみならず、日本國內の實地調査をもあわせ行なつて、被擄人の問題を中心に、いわゆる文祿・慶長の役（この事件の呼稱は、論者の立場・視點等によつて、かなり多岐にわたっているが、本稿では便宜上本書の表題に従つて、上のように稱することとする）の實態と本質の究明に努めてきたが、本書はそうした著者の研究を集大成したものである。すなわち、「朝鮮學報」を中心に發表された既往の諸論考を増補し、改訂して收録するとともに、新たに書下ろした論考を加えて、體系化がなされており、次に掲げるような構成を有している。

序

第一章 壬辰・丁酉役における被擄朝鮮人の刷還問題について

——朝鮮史料による——

第二章 文祿・慶長役における被擄朝鮮人の遺問について

第三章 「錦溪日記」釋讀

第四章 慶長丁酉の役、被擄學人間の雅遊について

第五章 壬辰・丁酉役における謂ゆる「降倭」について

第六章 僧慶念「朝鮮日々記」

第七章 秀吉の朝鮮役に従軍した一日本僧の戰爭觀について

第八章 歸化醫師泉大官とその系譜——附 朝鮮信使迎接日記について——

第九章 被擄人資料採訪記

ところで、著者は本書の中で、各章の記事（いずれも個別論文の形をとっている）の原所在を明示しておらず、文獻檢索という點でやや不便を感じるが、判明するものを示すと次の如くなる。第一章——「朝鮮學報」二九、三三、三四（一九六三、六四、六五）。第二章——「同上」四四、四九（一九六七、六八）。第四章——「同上」七一（一九七四）。第五章——「同上」三七・三八合（一九六六）。第六章——「同上」三五（一九六五）。第八章——「同上」四八（一九六八）。第七章——「ノートルダム清心女子大學紀要」一の一、一九六五）。これら以外の第三章および第九章は本書の上梓に際して新たに書下ろされた文章である。

二

次に、本書の内容の概略を順を逐つて紹介しておくこととする。

第一章では、まず「看羊錄」（姜沆）・「月峯海上錄」（鄭希得）等被擄人の記録を中心にして、當時の被擄朝鮮人の状況を概觀し、つい

で「海樞錄」(慶運)・「東槎上日錄」(吳允謙)・「東槎錄」(姜弘重)などをはじめとする朝鮮側使節の記錄に依據して、宣祖末年(一七世紀初め)から仁祖中期(同前半)に至る被虜人刷還問題について詳述している。さらに、これらの諸記錄の記述に基づいて、當時の被虜朝鮮人の數量と分布、受けていた處遇、日本觀などの點についても論及している。

被虜朝鮮人の中には、自ら脱出したり、あるいは日本側との刷還交渉によるなどして歸國した者もあったが、多くは日本にそのまま留まって、その社會・文化に融合した。第二章では、そうした人々の問題が取扱われている。前半部では、島津藩の特別な保護を受けて、集團的に陶磁器製造に従事し、長く朝鮮独自の風俗を保持した苗代川の人々の歴史的推移と役割などが述べられている。後半部では、比較的早い時期に日本社會に同化・融合した人々の例として、四人の佛僧がとりあげられ、彼らの事績が記されている。

第三章では、慶長の役で捕虜となり、日本に送られていたが、折よく日本に派遣されてきていた明使の援助を得て、自力で脱出し、明を経由して歸國した魯認の日記「錦溪日記」に關して、原本に依據して訓點を施し、詳細な校訂と註釋を行ない、さらに原文の大意をとった解説がなされている。

次の第四章は、いずれも慶長の役に捕虜となり、日本に伴われて來ていた姜沆・鄭希得・魯認の三人が、日本滞在中に主として詩文によって相互に連絡をとり、自己の胸中を吐露していることを、彼らの文集とか日記などに收録されている各種の文章によって明らかにし、あわせて、それを通して彼らの日本での被虜生活の實情をも窺おうと試みている。

文祿・慶長の役の被虜人は決して侵略を被わり、戰場となった朝鮮の人々に限られたのではない。侵略者としての日本人もまた多くの者が捕虜となったり、時には各種の事情から投降したりした。第五章でとりあげられている降倭はそれに當る。同章では、「李朝實錄」を中心に、この降倭の發生狀況とか處遇について考察し、文祿・慶長の役の推移に伴って降倭がいかなる形態をとって現われ、また彼らが戰役遂行にどのように關係したか等の點について概観している。

第六章では、慶長の役に、九州臼杵城主太田飛騨守一吉の側近として従軍し、戰爭の實際を見聞した日本人僧侶慶念の日記「朝鮮日々記」の釋讀が行なわれている。草稿本に依據しながら、轉寫本と校合し、詳細な註を施した上、さらに、草稿本と轉寫本の關係、著者慶念の經歷、日記中に示された彼の思想等を中心とした解説が付けられている。第七章は、この「朝鮮日々記」にみられる、著者慶念の戰爭觀について改めて詳述したものである。慶念の同日記は、九ヶ月に及ぶ彼の從軍中の見聞を約三四〇首の和歌に詠み、それぞれに詞書を付ける形で記されているが、内藤氏は、慶念が武功に關しては一切觸れず、むしろ戰爭の悲惨さと空しさを率直に述懐していることを明らかにし、この日記のもつ價值の重大さを指摘している。

第八章は、ほかの諸章とはやや趣を異にしている。すなわち、文祿・慶長の役の被虜人としてではなく、一六世紀前半に恐らく朝鮮から出雲地方に渡來し、醫術によって重んぜられ、のちに小泉と改姓した泉大官という人物およびその子孫の事績を、小泉家所藏の文書を中心に記述している。小泉氏はのちに周防の上關に移居した

が、同地は瀬戸内海航路の要衝で、江戸時代の朝鮮使節も必ずここを経由している。小泉家の文書中には、同地での朝鮮使節應接に關する記録も含まれており、著者は、それらに依據して、上關での朝鮮使節渡來時の秋藩の接待の状況およびその際の小泉氏の醫者ととしての活動等についても考察している。

最後の第九章は、著者が被虜人の研究をするに當つて、九州・四國・中國・近畿の各地で行つた實地調査と資料蒐集の記録である。各地域ごとに調査の内容、蒐集した資料とそれにより判明した事實等について記述がなされている。首尾一貫した論文の體裁はなしていないが、取扱われている主要對象は、日本社會に同化し融合した一般被虜人であり、いわば、第二章と相互補完的關係にある文章といえる。

三

以上簡単に紹介したように、本書では、文祿・慶長の役の被虜人に關して、大きく分けると、日本側に捕えられた朝鮮人の刷還、日本に永住・同化した被虜朝鮮人の状況、朝鮮側に捕虜となつた日本人の動向、當該問題に關する重要史料の紹介と釋讀等四つの問題がとりあげられている。

最初の被虜朝鮮人の刷還問題については、被虜人自身、あるいは刷還交渉使等の記録に依據して、實證的かつ具體的な記述がなされている。そこでは、被虜朝鮮人の刷還問題が、戦役後の日朝兩國の國交再開の重要契機となり、さらにその後の國交の維持・活潑化にも常に口實となつていたことを指摘して、刷還交渉そのものの経過が克明に述べられているだけではない。戦争の過程で捕虜となるこ

との悲惨な状況、日本に連行されて以後の被虜朝鮮人の實情などについても隨所と言及がなされており、それらの問題に關する詳しい研究ともなっている。その中でも、とくに、二、三萬に及ぶ多數の朝鮮被虜人が連行されたのは、主として、戦役に多くの百姓・地下人が動員されて生じた日本國內の勞働力不足の補給のためで、彼らの多くは奴僕として使役されたのであり、そのほか勞働力不足の補填の手段として、日本各地から人買い商人が入りこんで、朝鮮人の強制的掠取も行つていたこと、刷還交渉の進展によつて、歸國の途が開かれながら、實際には歸國希望者が意外に少なく、刷還事業は充分進捗しなかつたのであり、その理由は、單に日本側の態度が不誠實だつたというだけでなく、戦争後二、三〇年を経過する中で、主人である日本人に對する恩義から、あるいは日本人と結婚して子や孫を設けるまでに日本に土着・安住した結果、それら日本人の配偶者や子孫に心を引かれたりなどして、たとえ歸國の意志をもつたとしても、結局歸國を思いとどまらざるを得ない者が多かつたこと、一方、刷還の取決めに基つて歸國したとしても、本國においては、政府の受入れ方針が確立しておらず、冷遇され、忽ちにして衣食に窮する場合が多かつたこと、そうした本國での苛酷な處遇に關する噂が廣まつて、歸國を誑める者もみられたことなどが指摘されているが、これらの點は被虜人の境遇、さらにはそうした被虜人を生んだ文祿・慶長の役そのものなどの悲惨さを讀む者に改めて思い知らせてくれる。

二番目の日本に同化・融合した朝鮮人被虜人の問題に關しては、薩摩の苗代川をはじめとする九州あるいは中國各地の陶磁器製造、儒學や佛教などの學問・宗教、醫術、さらには政治等の各種の分野

における彼らの活動ぶりが具體的に示されている。これによって、朝鮮人被虜者が當時の日本の文化・社會・政治等の發展に大きな寄與をしたことを知り得る。第九章の被虜人資料採訪記には、著者が各地で新たに發掘しながら、まだ研究論文としてまとめるには至っていない多くの被虜人の事例が示されている。ここに示されている諸事例の研究を一層深化・發展させることによって、日本に永住・同化した被虜朝鮮人の實態とか歴史的役割について今後さらに究明される可能性があるというべきであり、その點を期待したい。とくに、本書で著者が主としてとりあげている、大名の保護下に集團的に固有の風俗・習慣を保持し得た人々とか知識階層に屬する人々等比較的恵まれた立場にあった者たち以外の、文字通り日本の市井の片隅に埋もれて過した一般被虜人の實態や役割が明らかにされることを期待したい。

三番目のいわゆる降倭については、從來断片的な研究はあったが、「李朝實錄」等朝鮮側史料によって、戦局の推移全體の中で、降倭の發生狀況の變化、降倭發生の事情、降倭に對する處遇と彼らの果たした役割等について考察し、いわば文祿・慶長の役における降倭の全體像を明らかにしようとしたのは本書が最初といえる。すなわち、本書では、激しい戦闘が展開された戦役の初期と末期には降倭の数は少く、しかも斬殺される場合が多かったが、戦況の膠着化とともに降倭の数も増大し、朝鮮側でも、彼らの保有する特殊技術を戦闘に利用したり、あるいは彼らにスパイ的役割を果させるなど、降倭を積極的に利用する方針をとるに至っていることなどが詳述されている。その中で、降倭増大の理由として、戦争の長期化・膠着化とともに、日本軍將士の間に厭戦氣分の擴大、加えて食糧不

足の深刻化がみられ、その結果逃降者が續出するに至ったことを舉げ、さらに、姜沆の看半錄によって、朝鮮に出兵した日本軍兵士たちが、自分らの置かれた現状に比較して、「朝鮮は誠に樂國なり。日本は誠に陋國なり。」と述べていたことを指摘しているが、これらの點は、文祿・慶長の役の一つの側面——それに動員された日本の民衆の意識や動向——を鋭く呈示するものといえよう。

最後の重要史料の紹介と釋讀は、上記の如く、「錦溪日記」と「朝鮮日々記」を中心になされているが、いずれも流布本などではなくて、原本に基づいてはじめて他本との校合および釋讀を行い、さらにそれらの内容に關する詳細な紹介・分析を行っている。その中で、とくに重要なのは「朝鮮日々記」の釋讀と分析である。前述のように、同書は慶長の役に大名の侍醫として從軍した佛僧慶念の日記で、日々の見聞を詠んだ和歌と詞書によって構成されている。そして、そこに記されているのは、決して戦功の誇示などではなく、むしろこの戦役の悲惨さと朝鮮民衆の被った苦難、動員された日本人兵士や人夫等にみられる不平不満、厭戦氣分、歸國を希求する氣持などが具體的に述べられ、さらにそれを踏まえて、慶念自身の戦争を厭い、平和を祈念する考え方が隨所に示されている。要するに、この「朝鮮日々記」は、文祿・慶長の役における日朝兩國民衆の動向、とりわけ日本の民衆のそれを究明するための重要な史料だといえるのであり、そのことを著者は明快に指摘している。同日記をはじめとして、本書で著者が釋讀・分析ないし紹介をしている新しい史料類は、今後の同戦役の實態の究明に大きく寄與していくであろうと考えられる。

四

文祿・慶長の役に關しては、戰役そのものの推移、その歴史的意义、日本・朝鮮・明三國それぞれの主體的條件等をはじめとして、多方面からの解明が必要であり、實際そのような形で從來研究が進められてきている。その中で、内藤氏は、はじめて被虜人の問題を本格的にとりあげ、その究明を通して、侵略を被った朝鮮民衆の苦しみを闡明に浮彫りにすると同時に、侵略者としての日本民衆の側にも、この戰役に對する強い不満と批判が存在したことを明らかにしている。從來、とかく文祿・慶長の役を、日本史の問題として、また表面的な政治の動向を中心にして追求する傾向が強かったのに對して、著者は朝鮮人の立場、民衆の立場に視點を据えて、いわば裏面史に光を當てることによって、同役すなわち豊臣秀吉の朝鮮侵略の實態・本質等を考察しようとしたのであり、この點に著者の研究の獨自性と意義があるといえる。

しかも、著者はすべての問題に關して、具體的史料を博搜し、それに基づいて立論をしている。従つて、本書の記述は非常に客觀的なものとなっており、事實が坦々と客觀的に述べられているだけ

に、その中で明らかにされている同戰役の悲慘さ、朝鮮・日本兩國民衆の苦しみなどが讀む者に一層強く訴えかけてくるのである。また、その是非は別として、近年朝鮮、とりわけ南朝鮮との人的交流が進み、その中で、豊臣秀吉の朝鮮侵略が朝鮮人の對日感情の重要な基礎をなしていることがしばしば指摘されている。その場合、日本人としては、そうした現象に對して、單なる感情的なものともみなして對應する傾向が強い。それに對して、本書は、豊臣秀吉の朝鮮侵略が、戰爭時に莫大な被害をもたらしただけでなく、その後の日朝關係の出發點をなし、常にその上に大きな影をおとしていたことを實證的に明らかにしているのであり、同役が朝鮮人の對日感情の重要な側面をなしているのには相應の歴史の根據のあることを讀む者に理解させてくれる。そうした意味において、本書は、現在我々が朝鮮あるいは朝鮮民族といかに關っていくべきかについて考えていく上での、多くの反省材料と有益な示唆を與えてくれるものだともいえる。

以上、不十分ながら、本書の紹介をも兼ねた書評を行ってきた。終りに、著者の今後の健康と一層の研究の進展を祈るものである。

(北村秀人)

「東洋史研究」バックナンバー在庫一覽

第二十八卷第一號	* 1,000圓	第三十一卷第一～三號	各 1,000圓	第三十五卷第一～三號	各 1,000圓
第二十八卷第二・三號	1,350圓	第三十一卷第四號	1,350圓	第三十五卷第四號	1,350圓
第二十八卷第四號	* 1,350圓	第三十二卷第一～三號	各 1,000圓	第三十六卷第一～二號	各 1,000圓
第二十九卷第一號	* 1,000圓	第三十二卷第四號	1,350圓	第三十六卷第三號	1,350圓
第二十九卷第二・三號	1,350圓	第三十三卷第一～二號	各 1,000圓	以上のお申し込みは左記へ	(* 印残部僅少)
第二十九卷第四號	1,350圓	第三十三卷第三號	1,350圓	京都市左京區吉田本町	
第三十卷第一號	1,000圓	第三十三卷第四號	1,000圓	京都大學文學部内	
第三十卷第二・三號	1,350圓	第三十四卷第一～三號	各 1,000圓	東洋史研究會	
第三十卷第四號	1,350圓	第三十四卷第四號	1,350圓	振替 京都 三七八番	